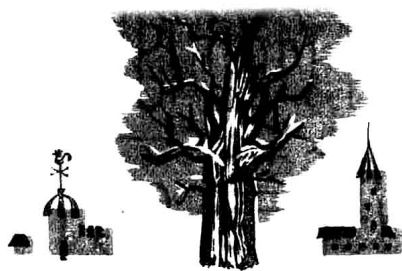


詩のつくり方

西條八十著

つくり方

西條 八十



雄 鷄 社 刊

詩のつくり方

昭和二十二年七月二十日 印刷
昭和二十二年七月三十日 發行
昭和二十四年二月二十日 四版

著 者

定 價 百五十圓
西 條 八 十

發 行 者

東京都中央區日本橋江戸橋一ノ七
武 内 俊 三

印 刷 者

東京都千代田區神田神保町三ノ三
鈴 木 竹 次 郎

發 行 所

東京都中央區日本橋江戸橋一ノ七山叶ビル
株式會社 雄 鷄 社

電 話 日本橋(24) 四九〇二
會 員 番 號 (A) 一一五〇〇五

落丁亂丁の場合は早速御取換致します

配給元・日本出版配給株式會社

序

詩に志す初心の人たちの手ほどきになるやうな本を書きたいと、いつも思つてゐた。今度やつと小閑を得てこれを纏めることが出来た。自分でもうれしく思つてゐる。「詩とは何ぞや」的なむづかしい論議は避けて、ここには詩作に直ぐ役に立ちさうなことだけを、自分の経験から述べてみた。しかしこれをよく讀めば「詩とは何ぞや」的な問題もおほよそはおのづから解決出来るとおもふ。この書によつてよい詩を書く者が一人でも殖えたらわたしの幸福である。暇さへあればこれに續いて、もうすこし程度の高い「詩のつくり方」を書いてみたいと考へてゐる。

昭和二十二年初夏

著 者

目 次

序

一 詩作の準備……………三

一 第一に必要な感動……………六

二 第二に大切な表現……………一四

二 詩はどんな風に書いたらよいか……………三

一 敘景詩と敘情詩……………二

二 想像から生れる詩……………四

三 感覺から生れる詩……………五

四 寫像に據る詩……………六

五 比喩や暗喩に據る詩……………七

六 象徴に據る詩……………八

七 未來派、立體派、超現實派の詩……………九

八 純粹詩……………一二

九 機刺詩……………一八

十 古い詩と新しい詩……………二三

三 詩の形について……………二三

一 一定形詩と自由詩……………二三

二 自由詩の主張とその功罪……………三五

三 詩に缺くべからざる二つの要素……………五〇

四 廣い意義の詩と狭い意義の詩……………五三

五 今後の詩形はどうなるか？……………五五

四 詩作の實際……………五九

一	感興	一五
二	言葉	一六
三	音樂性	一六
四	新しさ	一七
五	想像力	一七
六	省略の必要	一八
七	題の附け方	一八
八	行の切り方、句讀點、振假名	一八
五	詩と歌謠	一九
六	譯詩の讀み方	一九
七	詩人の使命	一九

八 詩の味ひ方

二九

小諸なる古城のほとり（島崎藤村）……智慧の相者は我を見て（蒲原有明）……時のつぐのひ、白すみれ（薄田泣菫）……漂泊（伊良子清白）……お才、やれだいいこ（横瀬夜雨）……牛（三木露風）……かかるとき我生く（日夏耿之介）……時の流に（竹友藻風）……ふみから（三好達治）……海べの戀（佐藤春夫）……游泳、戀を戀する人（萩原朔太郎）……宵の歌（ポール・フォール）……記憶のない記憶（稻垣恒子）……夜學生、ローマン派、速力（杉山平一）

九 日本詩壇の鳥瞰

三四

詩の
つくり方

西條八十著

一 詩作の準備

● まづこの本を讀まうとする人なら、詩といふものが大體どんな形の文學であるかは、すでに知つてゐられるであらう。紙の上下を普通の散文よりも白くよけいに明けて、長く短く行列した一連の文字——その姿が漠然と諸君の腦裡に浮んでゐるにちがひない。詩の形は、まづ小説や戯曲などよりは短く、短歌俳句よりは長い。

ところで、詩は俳句や短歌とひとつにくるめて國詩とも呼ばれるが、俳句には十七字といふ文字數の制限があり、短歌には三十一文字といふ制限があるのに、詩の文字數は？といふと、これには制限は無い。いや、文字數に制限が無いばかりか、そのほか一切形のうへで、詩といふ文學形式には、なにひとつ制限らしいものが無いやうに見える。

たとへば――

せつなき戀をするゆゑに
月かげさむく身にぞ沁む
もののあはれを知るゆゑに
水のひかりぞなげかるる。
身をうたかたとおもふとも
うたかたならじわが思ひ
げにいやしかるわれながら
うれひは清し、君ゆゑに。

〔「水邊月夜の歌」 佐藤春夫氏〕

のやうに流暢な七五調の美しい形もあれば、

森の中の小徑こみちにそうて

まつ白い共同椅子がならんでゐる。

そこらはさむしい山の中で

たいそう緑のかげがふかい

あちらの森をすかしてみると

そこにもさみしい木立がみえて

上品なまつしろな椅子がそろつてゐる。

（「白い共同椅子」萩原朔太郎氏）

のやうな、すつと散文に近い形の詩もある。いや、もつと極端な、どう讀んでみても全然散文とちがはないもので、ただ上下を白くよけい明けただけで、しかも詩と呼ばれてゐるものがたくさんある。

では、現在、詩と呼ばれるものは散文とまつたくおなじものであるか？　ただ、すこしばかり書きやうが違つてゐるだけなのであるか？　さういふ質問に對して、わたしは「否」と答へたい。詩と散文との區別は當然在るべきものと答へたい。しかし、わたしはこの

本で、最初からさうしたむづかしい詩の議論をやるつもりは無いから、詩形の問題にはあ
とで觸れることにして、もつと詩作に直接必要なことから話してゆかう。

一 第一に必要な感動

そこで、いま諸君が、形はどんなでもいいとして、詩を書かうと思ひ立つたとする。そ
れには第一に何が必要かと言ふと、それはいつたい何を書かうとするか、つまりこれから
詩に盛らうとする感動である。

わかり易いやうに例を引いて話さう。

十月の朝あしたの辻に

並びたつ四本よもとの銀杏ぎんぎょ。

ゆきすぎて、またふりかへる

青空の日光はうすし。

ああ、神も寂しきときは

翫とりて うたひたまふか。

十月の朝の空の

燦けき金の四行詩。

（銀杏 西條八十）

これは、十月の朝、わたしが或る郊外の道を歩いてゐて、四本の銀杏の樹が並んで立つてゐるそばを通つた。その銀杏の葉はいづれも黄金いろになつてゐて、それが朝の青空を背景に、實に美しく輝いてゐた。わたしには、なんだか、それが神によつて大空に書かれたおごそかな四行詩のやうな氣がした。神も、寂しい時にはペンをとつて詩を書かれるのであるか？——さうした一瞬の感動が、わたしにこの詩を書かせたのである。つまり、出

來上つた作品の巧拙は別として、詩作にはまづかうした感動が第一に必要である。

では、かうした感動はどうすれば獲られるのか？ それは、この「銀杏」の詩の場合に於ては、わたしが藝術家の心で自然を眺めたからである。これから急いで停車場へでも行かうとする人のやうに、眼前の實際的な用事に没頭してゐる人には、たとへ路ばたの銀杏並木がどんなに美しからうと、眺めてゐる餘裕はない。まして美しいとか美しくないと考へる暇もなからう。詩を生むには、その作者の心がありふれた現實のごたごたした細かい事から離れて、藝術的に燃えてゐなければならぬ。

およそ、人間がこの地上に生きてゆく、その生き方かたにざつと二通りある。そのひとつは「生存」することであり、もうひとつは「生活」することである。喰ひ飲み、家族を養ふために終日働き、さうして疲れたら眠る。——ただそれだけの生き方かたをしてゆくことは「生存」である。これは人間ばかりでなく、すべての生物いきものの生き方である。だが「生活」することはさうで無い。それは前者のやうな生き方をしたほかにもうすこし心に餘裕を持たせ、自分の生きてゆく周囲のいろいろなものを觀察し、又この人生をちつと廣く深く考へることである。春や秋や季節の移り變りにあはれを感じ、咲く花、散る落葉に人間の盛衰